

# 東アジアの近代と「翻訳」

——近世帝国の解体と学術知<sup>①</sup>

桂島 宣弘

## 一 近世帝国

ウォーラーステイン (Immanuel Wallerstein) の世界システム論に孕まれた西洋中心史観を批判的に継承・検証している山下範久は、一八〇〇年前後以降はウォーラーステインが説くような西洋世界—経済の拡大に世界が呑み込まれていく過程としてのみ捉えるべきではなく、近世帝国 (画期としての十六世紀を経て形成された不完全な帝国体制) が解体して「グローバリテイの区切り」の起こった世界史的事態と捉え、その後「帝国不在」の国民国家的世界が表出するに至ったと説く。<sup>②</sup> 未だ試論的な仮説であるとはいえ、自国⇨日本 (韓国) を中核として西洋・東洋を捉える見方にあまりに馴染んできた、その意味では自国中心主義やオリエンタリズム (Orientalism) に蝕まれているわれわれにとつては、示唆的指摘である。要するに十九世紀前後に東アジアで起こった事態⇨「ウエスタン・インパクト」は、決して「局地的」な事態ではなく、世界全域で (その意味では西洋においても) 起こっていた事態⇨世界史的転換点の一環として捉えられるべきだというのである。同時に山下は現下の「帝国化」<sup>③</sup> をも射程に入れつつ、現在のグローバリゼーションについても、その「グローバリテイの区切れ」といういわば世界史的には例外的な事態——この意味ではわれわれがこれまた馴染んでいる国民国家体制 (世界が百五十以上の国民国家に分割されて統治されている世界体制) も例

外的な事態ということになるが——を収斂させる転換 (山下は、これを「新しい近世帝国」化という)<sup>④</sup> が進行中なのだと言く。念のためいえば、アメリカ中心の覇権主義は、グローバリゼーションの「産婆役」を果たすことはあっても、むしろアメリカという国家主権をも解体する作用をもっていると言われる。ウォーラーステインの帝国概念とネグリ&ハート (Negri & Hardt) の「帝国」概念は、様々な面で大きく相違するものがあり、この二つを横断しながら組み立てられている観のある山下の議論にはなお賛同できない点が存在する。だが、ウォーラーステインの帝国概念を、ある言説的な「普遍性」が共有されている空間と置き換えるならば、国民国家的な「閉じられた」理念が主として共有されている現下のシステムを例外的な事態とし、さらにそこから「開かれた」「普遍性」の共有へと〈回帰〉していくべき道程として現代世界を捉える視点は、やはり傾聴に値するものといえよう。ここで、敢えて〈回帰〉という言葉を使用したのは、(それこそが、本稿の内容と密接に関わるのだが) 確かに十九世紀前後までは、いかに限界をおびたものであるにせよ、そこには (近世帝国的な) 帝国が共有されていたからであり、であればこそ「翻訳」は原則的には不在であったという事態に注意を喚起したいからである。

無論、山下によれば、近世帝国は、それ以前の帝国——それこそまさしくウォーラーステインが世界・経済と対立させた帝国だ——とは異なる

って、理念としての「世界」を共有しつつも、域内外で基準を使い分けるダブルスタンダードが確立した過渡の様相を示しており、この意味では理念としての「世界」が言説的な意味での言語（「聖なる言語」<sup>⑤</sup>、たとえばラテン語や漢字⇨中国語など）とともにヘゲモニー的に共有され、したがって「翻訳」など到底想定されていなかった十六世紀以前の時期とは異なつた段階にきていることにも留意する必要がある。徳川日本の場合でいえば、役方文書におけるいわゆる「和製漢文」の登場・使用や、和歌革新運動に端を発する国学的言語論の登場などは、こうした段階を象徴的に示すものと考えられよう。だが、少なくとも近世国内では「翻訳」が不在であり、多くの儒家知識人などをあげるまでもなく、むしろそれを忌避・批判するような近世帝国の二元的求心性が未だ作動していたことは明白だろう<sup>⑥</sup>。逆にいえば、「翻訳」とは、こうした「世界」の共有が解体される中で初めて登場した営為であるということ、したがってかつて四世紀〜六世紀頃といわれる漢字の「伝来」<sup>⑦</sup>が畿内・九州周辺の言語に影響を与えた事態とは全く質的に異なる事態であつたことに、われわれは注目しなければならない<sup>⑧</sup>。念のためいえば、確かに地理書・天文学書などの西学が（清朝や朝鮮王朝同様に）徳川日本には伝播しており、それらは「翻訳」的行為によって理解されてきたとみなされてきた（マテオ・リッチの万国図、魏源『海国図志』など）。だが、これも多くの研究が明らかにしているように、主として清朝経由の漢訳西学書として、いわば他の経学書と同様の手続を経て読解されていたのであり、厳密には近世帝国の「世界」内への受容行為であつたといえよう。医学書などに重点が移って以降の蘭書からの直接の読解にしても、逐語的に漢語に変換し、それに返り点などをふって、いわば漢文訓読法で読解されていたといわれており<sup>⑩</sup>、ここにも近世帝国的なあり方をみとめることができる。定義を問題としているわけではないが、これらはいずれも厳

密には「翻訳」と捉えられるべきではないと、わたくしは考えている（無論、三で検討するように、こうした擬似「翻訳」行為も、やはり重要な認識論的転換を促しつつあつたことは否定できないのだが）。また、荒野泰典がのべているように、近世国内にも確かに「通訳⇨通詞」は存在していたが、かれらは「境界地域のマージナル・マン」として、脱国籍性・民族横断性を色濃くまといつつ、多様な言語を、しかも不断に形を変えつつ、ときにはその境界のみで通用する、いわばクレオール語的な言語を操るものであつたことも、近世国内には基本的には「翻訳」が不要であつたことを鮮明に物語るものといえよう<sup>⑪</sup>。

## 二 「翻訳」という実践

では、「翻訳」とは何か。既にのべてきたように、「翻訳」を近世帝国が解体し、その「世界」の共有が解体される過程で登場したものと捉えるならば、「翻訳」を、ある学問なり概念を、ある「言語統一体」の言語（たとえば英語）から、他の「言語統一体」の言語（たとえば日本語）に置き換え、そのことによってある学問なり概念を正しく理解し、あるいは誤解し、そのことによって、英語等で表記されている、ある近代的な学問なり概念を把握するという単純なものではないことが明らかとなつてくるだろう。現象的にはそのように映じ、また少なくとも一九八〇年代までは、そのようなものとして近代化と「翻訳」の関係が説明されてきたのは事実としても、置き換えという関係のみで、近代化⇨西洋化と「翻訳」が説明できないことがここでは重要なのだ。酒井直樹が指摘するような、そもそも「翻訳」という行為自体が、多言語的状况から想像の産物としての「言語統一体」自体を生成することに大きく与つているのだという問題は、ここではしばらく措くとしても、近代における西

洋文献の「翻訳」とは、近世帝国の解体を受け、世界・経済体制へ、具体的にはそれを媒介した西洋近代の言説的な権力関係に全面的に投企せんとする政治的な実践であったこと、そして近世帝国の「世界」とは全く異なった言説空間へと投企する実践であったことが看過されてはならないだろう。すなわち、それは、西洋文献のある概念を、日本語等の概念に置き換える行為（無論、新たな造語も多かったのだが）であるかに見えて、その概念自体を概念たらしめているイデオロギー編制、構造、換言するならば言説的関係の中に身をおかされるという、それ自体がヘゲモニー的な実践であったといわなければならぬ。たとえば、サイードのいうオリエンタリズムが、何故、西洋人でないもの（このいい方自体も問題だが）、たとえば日本人によっても再生産されていくのかを想起すると分かりやすいかもしれない。オリエントに冠された夥しい修飾やオリエントにまつわる文脈の一つ一つが、学術書や文学書から「翻訳」され、誤解も含めて読解されることで、一方には西洋の揺るぎなき中心性が確立し、他方にはその眼差しに身をさらしつつ、やがてそのように世界を構成し、眺め直すという姿勢が、まさに「翻訳」書上のみならず、それと今や不可分のものとして新たに確立した学術自体として編制されていったのである。そもそも十九世紀以降にこれほど急激に西洋文献が「翻訳」されなければならなかったこと自体が、このヘゲモニー関係を顕著に物語っていることはいままでもないが、それに圧倒された上で今度はそのヘゲモニー関係を自らのものとして、西洋を、自己を、そしてオリエントを眺め直すような作用が、「翻訳」行為によって生みだされていったことも見逃してはならない。近代における「翻訳」や、その上に構築された近代学術は、このようにして世界を構成し直す思惟自体を、テクスチュアルに構成し、かくてオリエンタリズムは、（屈折を伴いつつも）極東の地においても確立していったのである。

無論、それは一朝一夕でなされたものではないし、多くの試行錯誤を伴うものであったことはいままでもない。だが、これまでの研究に見られがちであったように、「翻訳」語がどの程度正確であったのかを論じてあまり生産的とは思えない（正確な「翻訳」という考え方自体が疑問である）。ここでは「翻訳」語が適切であるかどうかよりも、ある事物を、「詮索、研究、判決、訓練、統治の対象として、教室、法廷、監獄、凶鑑の中に配置する様式」<sup>15</sup> と言説が、「翻訳」実践それ自体によって構造化されていったことが、まず問題とされるべきなのだ。この点は、一見「翻訳」語に頼らなくてもよかつたかに見える「東洋的学術」（たとえば、「支那学」「国史学」「国文学」）も、その表層における儒学的様相とは対照的に、何故かくも深くオリエンタリズムに蝕まれることとなったのかを想起すれば足りるだろう。<sup>16</sup> 「翻訳」を逐語的な「翻訳」、要するに置き換えとしてのみ捉えるのではなく、概念を概念たらしめ、それらを問題化し配置する様式こそが、「翻訳」のより重要な作用としてあったことに注目することで、この問題は初めてわれわれの眼前にさらけ出されることになるのである。

### 三 「翻訳」の臨界

もともと、やはり「翻訳」が逐語的な作業を伴うものである以上、その具体的な様相にも、どのような言説的転換が起こったのかを捉えることは、やはり重要なことであるといえよう。紙幅も限られているので、ここでは事態をもっとも鮮明にすると考えられる二つの問題に限り、具体的にこの問題に言及しておきたい。まず第一は、「china」から「支那」という語が現れてくる問題。「支那」という語句自身は、新井白石『采覧異言』『西洋紀聞』にも見られ、徳川時代初期に既に使用されていた<sup>16</sup>

(ここにも中華帝国から「自立」しつつあった近世帝国の様相が見られる)。ただし、管見の限りでは、西洋の眼差しとの同一化によって(「翻訳」的行爲として)、中国の中華性を剥奪せんとする意味での使用は、十九世紀に前後する時期の蘭学者から始まったと思われる(それは、同時に西洋に立脚した国民国家のありようが範型として立ち現れてきたことと同義であるが、ここでは措く)。周知のことだが、大槻玄沢は中国について、「西洋諸国ヨリ今ノ清ノ地ノ古今ヲ総テ云フ名」としての「支那」と意識的に呼び、さらに次のようにのべている。

「吾方ヨリ支那ノ敖称ヲ以テ中華ノ国ト唱ヘ、華人・華船・華物ナド、称スルハ、何ノイワレナルゾヤ。惟慕効スルコト年久クシテ、何ニヨラズ彼ノ道ヲ喜ンデ他ヲ顧ミズ、剩ヘ地理ノ事ニ昧キノ余リ、耳目聞見限リアリテ、唐・天竺トイヘル名ノミヲ知レル輩、甚キニ至リテハ和蘭モ支那ノ所属トヲボヘ、或ハ支那ノ外ハ皆蛮夷トシテ論ジ及サズ」(『蘭学階梯』)。

中国・中華を「敖称」として拒絶する玄沢のこの言説は、「支那」という呼称がもたらした言説的転換を如実に物語るものといえる。明治初年になると、この「支那」は、「支那学」「支那文字」「支那語」などと、さらに広汎に使用されるようになるが、それが「nation」を前提とした視点への転換」を内包しつつ、たとえば最初の文学史書の一つとして知られる「文藝概略」(榊原芳野著、一八七六年、文部省『日本教育史略』所収)などに散見されるようになるなど、西洋の文学史を強く意識した学術と不可分の関係を構成していくこととなるわけである。この「翻訳」行為には、逐語的な問題ではすまされない、「脱亜」を志向していく近代日本のベクトルが既に認められることはいうまでもない。

第二に、西洋諸学の概念を儒学・朱子学の概念で「翻訳」せざるをえなかった問題がある。周知のように、幕末から明治初期の西洋学術概念は、儒学ことに朱子学的訳語で「翻訳」されていった。たとえば、サイエンスやフィロソフィーは「理学」(「窮理学」「格物学」など)と「翻訳」され、最終的にはそれぞれ「科学」「哲学」として定着し、後述するようにそれぞれ清朝・朝鮮王朝などの東アジアでも「日本漢語」として広がっていくこととなる。「理学」がサイエンス・フィロソフィーの訳語として当てはめられた背景には、形而上下を統一するものとして捉えていた朱子学的思惟の存在を認めることは容易である。また、当の西洋においても、サイエンスとフィロソフィーが未だ統一的に捉えられ、ようやく分化を遂げつつあったという事情も勘案するならば、あながちこの「翻訳」が不当なものであったとはいえないだろう。ところで、周知のように、学術知の「翻訳」において決定的な役割を果たした西周は、当然にも多くの「翻訳」語(『日本漢語』)をつくり出している。

「権利 義務 抽象 具体 事実 同一 確証 空理 合成 運用  
分類 思考 総合 体験 単元 有機 観察 衝動 感性 虚無 理  
性 先天 後天 …」。

これらの多くは、『論語』『孟子』『易経』『中庸章句』、さらには『史記』などから造語されたもので、森岡健二の調査では三四〇個にのぼるといふ<sup>24)</sup>。これを見るならば、儒学的語彙が西の「翻訳」において、大いに(役立った)ことは否定すべくもない。だが、無論問題は(役立った)とのみ評しうるものではない。形而上下に関わるさまざまな認識論的転回がここから生みだされ、それが近代日本の諸学術の構造を規定づけていくこととなる点が看過されてはならないだろう。この点は多くの側面

から検討されねばならない問題であるが、ここでは明治年間の人文社会諸学が、こうした儒学的語彙による「翻訳」に依拠しながら、そうであればこそ（表層とは逆に）儒学的思惟の解体に寄与したことを指摘しておきたい。すなわち、西は、西洋学術を「物理」と「心理」、すなわち形而上下の分離にもとづいて分類を行うが（『百学連環』）、それらの関連について次のようにのべている。

「物理ト心理トヲ混同シテ論ジテハナラヌコトデゴザルガ、其物理ヲ参考致サナクテハナラヌト申スノハ、人間モ天地間ノ一物デゴザレバ物理ヲ参考致サナクテハナラヌデゴザル」（『百一新論』）。

ここには、過渡的には形而上学優位を前提とした形而下的（と捉えられた）西洋学術の分離的受容が現れたもの（佐久間象山など）、西においては「物理」優位の下での形而上学の解体的包摂がなされていたことが示されている。それがダーウィニズム（社会ダーウィニズム）の隆盛とも相まって、明治中期以降の歴史主義の背景となったことについては、かつて論じた<sup>23</sup>。やや後の発言になるが、近代国史学の確立者の一人として知られる久米邦武の語るところが、その様相を明確に物語っているの<sup>24</sup>で以下に紹介しておきたい。

「私は西洋の学問の様を傍観しまするに、理学から広まったものと思ふ。研究の仕方が理学者の物質的を試験研究するために設けた標準文科の法が本になつて夫から無形的に其組織を推及ぼしたものと、かう見当を付て居る。（中略）古記古物をば一の動力と見て、地理は距離、年月は即ち時間であるから、理学に動力を論じて、動力、距離、時間の三つ揃はねば物は運動することを得ないといふ理に吻合します。物

質的でも、動物的でも、感情的でも、一貫の理がある。歴史事実を見るにも、事は即ち物体の所為であるから、物理の規則の如くに運動して居るから、其標準を忘れぬ様に注意せねばならぬはずだ」（『史学の標準』『史学雑誌』五一九号、一八九四年）。

こうした発言は、社会進化論の代表的論者として知られる加藤弘之や学術の制度化に努めた井上哲次郎などにも見られ、十九世紀後半の知識人に広汎に認められるものであったといえる。これらには、近代日本における「翻訳」による学術知の受容・構築が、儒学的思惟の解体を促進し、それが明治日本の学術における無機的に見える実証主義<sup>25</sup>歴史主義の温床となっていたことが物語られている。それこそが、「心理」を本然とした朱子学・性理学とは正反対に）儒学的語彙による「翻訳」が然らしめた、近代日本の学術知に刻印されたものの一つであったと、わたくしは考えている。

#### 四 「翻訳」と学術知

先にのべたように、「翻訳」にとつてのもっとも重要な問題は、ある事物を、「詮索、研究、判決、訓練、統治の対象として、教室、法廷、監獄、凶鑑の中に配置する様式」<sup>26</sup>。言説が、「翻訳」行為それ自体によって構造化されていったことである。そして、そのことは、何よりも「翻訳」によって「西洋の学問社会」を知った当該期の知識人自体によつても、実は自覚されていたところであった。例えば一八九〇年に六年余のドイツ留学から帰国した井上哲次郎は、西洋列国で未だ東洋研究が「非常に幼稚」であり、東洋の学問に従事する学者が「動物学・植物学・地質学・気象学」以外は盛んではない状況を知り、早晩に「支那学」

に続いて「日本学」が西洋で起こるにしても「東洋の歴史を研穿して、其歴史上の事実を西洋に明らかに知らしむるのは、日本人の力」を待たなければならぬと痛感していたが、「西洋に明らかに知らしむる」歴史学については次のように述べている。

「歴史は大別すると二に分れます。即ち人民一般の読む歴史と、学者間にて研究する歴史とて、人民一般の用に供する普通の歴史と、引用書から理論から何から悉く書て置く学術探究の為にする歴史は別です。(中略) 歴史と申しても一般の歴史のみではありません、広く史学を指すので文学・宗教・美術・法制・然云ふ歴史を悉く東洋人が自ら任して研究しなければならぬ(中略) 各国に知らしめて公にするのが必要であります」(『史学会雑誌』二五号)。

ここでは、歴史(史学)には「人民一般の読む歴史」普通(普通)の歴史」と「学者間にて研究する歴史」理論から何から悉く書き置ける学術探究の為にする歴史」があり、後者こそが「西洋の学問社会」に「知らしめて公にする」必要があることが強調されているのである。したがって、歴史は、学術知と見なされた手続きを経た「真正の事実を知らせる」ものとして、「漢学者」ではなく、「翻訳」的学問に秀でた「欧羅巴の学問に通じ」る者によって担われなければならない。

「西洋にも日本の事に関する書物が、各国の言語で書いてあります。故に日本の歴史を書くにしても、西班牙(スペイン)——引用者、以下同)、和蘭(オランダ)、独逸(ドイツ)、仏蘭西(フランス)で出来た日本の事に関する書物を研究せむければなりません。(中略) 日本の歴史を欧羅巴(ヨーロッパ)に知らしめようと云ふ人は、愈々以て是等外国

の書類を十分穿鑿しての基礎を拵へなければなりません」(同前二六号)。

こうした井上の主張の背景には、「西洋の学問社会に東洋の史学が缺けて居るのを、東洋人が深く自ら研究をして、西洋人に知らしめて、学術社会一般の利益を図るのは、日本人の義務です。それに就て東洋人否日本人の利益のある所は、吾国の事情を明らかにすることが出来る、斯云ふ国体を往昔より建て、斯云ふ工合に発達したので、決して日本人は欧羅巴人の侮るべからざるものだ」と云ふことを知らしむるには、日本の歴史に如かぬのです。(中略) 日本の発達した進歩の程度を明らかにするには、史学を研究して、日本の歴史を欧羅巴に顕はして、彼国に知らしむるのが日本人の急務と思ひます。其歴史上の事実も分り、日本人の進歩したる程度も分れば、自から軽蔑の言は消滅するに相違ない」(同前二四号)という、「カウンター・オリエンタリズム」ともいふべき視点が存在していたことについては、かつて論じた<sup>24)</sup>。近代学術が実証主義的方法を伴った学術知として構成される背景には、こうした「西洋の学問社会」の存在があり、それが「翻訳」によって導入されることで、初めて当該期の官学アカデミズムの学問性は担保されるものと、井上はあからさまに語っているのである。

そして、明治三〇年代から四〇年代といわば世紀転換期前後の時期、すなわち日清・日露戦間期という帝国日本の最初の跳躍の時期とは、こうした学術知の内実を決するための重要な学問的制度化がなされていた時期であった。この間の動向を一瞥しただけでも、一方では「国史」の「始源」を科学的に実証しえるものとしての日本考古学・古代史学、人類学(日本人種論)の学問的確立があり、また言語学・国語学の学問的確立が古代からの体系的「国文学史」などの叙述を可能にしようと

していた。さらに東洋人を「代表」する日本人という観点を内に孕んで東洋学・東洋史学が誕生せんとしていた。そして、この帝国日本の最初の跳躍を背負ったの学問的確立<sup>11</sup>知的制度化とは、ただ単に「西洋の学問社会」で通用しえるところの学問的体系化に止まらず、西洋・東洋の二分法からする帝国意識としての他者認識に規定づけられていたことは明らかであった。「翻訳」的な学術知は、今度は東アジアを明確な射程に入れて転回していくこととなる。

## 五 「日本漢語」と東アジア

日本における「翻訳」には、当初は清朝経由の漢訳系洋書の「翻訳」が影響を与えていたといわれる。<sup>25</sup>だが、これは先にのべたように、基本的に近世帝国の「世界」内への受容行為であったと考えられる。だが、明治維新以後の日本での「翻訳」を経ての「日本漢語」の東アジアへの伝播は、日本経由での西洋的学術知のヘゲモニー的な関係を強いるものとして存在していたといわなければならない。<sup>26</sup>最後に、日本における「翻訳」と東アジアの関係について、ここでは朝鮮王朝（以下、朝鮮）を例にとりつつ簡単に検討しておきたい。朝鮮にとっては、まさに世界一経済との遭遇は、西洋との直接的関係に加えて、近世帝国から近代的宗主国として変貌しつつあった十九世紀後期の清朝、および急速に帝国主義化した日本との関係において生じたといえる。<sup>27</sup>このことが、朝鮮の近代国家化の問題を検討する上で、簡単には解きほぐしにくい複雑な問題を投げかけていることは、いうまでもない。

朝鮮における西学の伝播は、北学派や星湖学派に遡るが、これらはいずれも清朝経由の西学の伝播であり、近世帝国内への受容行為であったとわたくしは考えている。無論、これらについては（殊に星湖学派に対し

ては）激しい弾圧が行われ、徳川日本と比較しても著しく影響力が乏しいものであったといわれている。老論系朱子学が朝鮮中華主義と結びつきながら廟堂の中核にあった朝鮮では、近世帝国の「世界」は徳川日本以上に頑強に存在していたのである。そして、十九世紀後期に至っても事情は基本的には変化はなかったといえよう。確かに、いわゆる「開化派」知識人が、一八七〇年代には形成されていた（朴珪寿、呉慶錫、劉大致など）。その門下からは、日本につながりを求めた金玉均、李東仁、金弘集、兪吉濬、魚允中、朴泳孝、徐光範らが輩出していった。とりわけ、李東仁は最初に仏教僧として日本に密入国して以来、日本書籍を入手しては朝鮮に伝え、一八八〇年には第二次修信使として来日した金玉均が日本情勢を探った上で黄遵憲の『朝鮮策略』を国王に献呈するなどの動きの中で、西芸・西法の採取が模索されたこともあった。また、周知のように、一八八二年には金玉均が初めて来日し、福沢諭吉や樽井藤吉らと会見し、壬午軍乱・甲申事変へと続く「開化派」の展開が無視できないほどに大きなものとなっていた（一方で、清朝も日本と対抗的に留学生派遣を促し、洋務運動の成果が朝鮮に伝えられていた）。こうした「知の回廊」<sup>28</sup>によって、日本の学術知は部分的には朝鮮にもたらされていたことは事実としても、「グローバリテイの区切り」に対する朝鮮の抵抗はきわめて大きかったのである。

そして、「翻訳」知や「日本漢語」の浸食という事態に関していえば、一九〇四年以降の日本の侵略・植民地化の過程が決定的役割を果たしていたことはいうまでもない。<sup>29</sup>朝鮮語自体が抑圧され、日本語の強要と日本化政策が推進された中では、まさに学術知自体の制度化と並んで「日本漢語」は、圧倒的な力をふるったといわなければならない。こうした点からいえば、実は武断政策といわれた一九一〇年代同様に、文化的な侵略政策が敢行された一九二〇年代は大きな問題を投げかけている。さ

まざまな朝鮮学運動が、日本化に対抗して起こってきているが、この時期の対抗的な学術知の制度化や「翻訳」「日本漢語」による学問化の問題などは、未だ十分に検討されているとはいえない。

解放後の一九四六年に国語浄化委員会が設置され、『われらの言葉のとりもどし』が刊行されるなど（一九四八年）、確かに植民地時代の否定が、まずは言語自体の「とりもどし」として展開されたことは、歴史的には十分に理解できるところである。だが、さまざまな学問に未だに「日本漢語」が強く残存している状況は、やはり否定できない。「翻訳」知や「日本漢語」の流入が、日本経由での西洋的学術知のヘゲモニー的な関係を強いるものとして存在していた以上、それを「日本漢語」の除去の問題としてのみ、換言するならば日韓関係の問題としてのみ捉えることは適切ではない。しかしながら、日本における植民地支配を、この場合は学術知との関連において一つ一つ検証することが、実はすべからず「植民地近代」としてあった、あるいは決して平等などではない国民国家的世界を鋭くえぐり出していくことを意味するのであるならば、われわれは今後も根気よくその作業を行っていく必要があるだろう。そのことを今後の課題として、稿を閉じることとしたい。

（本学文学部教授）

## 注

- ① 本稿は、二〇〇六年一月二十九日に韓国嶺南大で開催された国際シンポジウム「東アジアの近代と文化」での報告に加筆・修正を加えて原稿化したものである。未だ検討途上の試論的な内容ではあるが、目下のわたくしの考え方を示すもので敢えて公表することとした。
- ② 『世界システム論で読む日本』講談社、二〇〇三年。
- ③ ネグリ&ハート (Antonio Negri & Michael Hardt) 『帝国』(水嶋一憲他訳) 以文社、二〇〇三年 (原著は二〇〇〇年刊)。
- ④ 前掲『世界システム論で読む日本』の他に、山下範久編『帝国論』講

談社、二〇〇六年を参照。

- ⑤ アンダーソン (Benedict Anderson) 『想像の共同体』(増補版、白石さや他訳) NTT出版、一九九七年 (原著は一九八三年刊、増補版原著は一九九一年刊、定本は二〇〇七年刊)。
- ⑥ たとえば、徳川時代の代表的「儒学史書」といえる『学問源流』(那波魯堂著、一七九四「寛政六年刊」) などでは、「朝鮮ハ朝鮮ノ風、琉球日本ハ琉球日本ノ風有テ其口気免レ難シ、清朝ノ人ノ詩亦唐ニ倣ウテ其清人ノ句調アリ」という彼の状況が記されているが、時代や地域の差を認めつつ「経学道理ノ要ハ言ニ不及、文章モ詩モ、信実誠ノ心ナクシテハ成就スヘカラス」というのが那波魯堂の主張したところだった。那波がここでいう「文章、詩」は無論「漢文」で記述されたものであって、その「和氣和習」を認識しつつも、「漢文」に習熟するならば彼我に共通する価値に到達するはずだという確信が語られていることに注目する必要がある。
- ⑦ 大島正二『漢字伝来』岩波書店、二〇〇六年などは、「漢字伝来」を既にあつた日本語への漢字の「翻訳」過程として描きだしている。
- ⑧ そもそも古代帝国がヘゲモニー的に「共有」すべきものとして古代日本に伝えた漢字、しかも前近代日本語自体もその「伝来」とほとんど同時に概念を獲得することで確立したといってもよい漢字の「伝来」という事態と、その帝国解体期における「翻訳」は、到底同様に論じることができない事態であるといわなければならない。最近の研究において近代日本語が二十世紀前後に確立したことが強調されるのも、「翻訳」を前提とした根底的ともいえる前近代言語の変容に対応しての、全く新しい国民語の確立が急がれたからと捉えることができる。
- ⑨ 山室信一『思想課題としてのアジア』岩波書店、二〇〇一年など。
- ⑩ 赤木昭男『蘭学の歴史』中央公論社、一九八〇年。
- ⑪ 荒野泰典『通訳論』『アジアのなかの日本史Ⅴ』東大出版会、一九九三年。
- ⑫ 『日本思想という問題』岩波書店、一九九七年。「翻訳」の発生とともに、クレオール性を帯びた通訳「通訳語」が消滅するのは(あるいはそれが「国語」となるのは)、このことによって確かに「言語統一」が固定



されるからであろう。

- ⑬ サイード (Edward W. Said) 『オリエンタリズム』(今沢紀子訳) 平凡社、一九九三年(原著は一九七八年刊)。
- ⑭ 同前。
- ⑮ 姜尚中『オリエンタリズムの彼方へ』岩波書店、一九九六年、拙著『思想史の十九世紀』ぺりかん社、一九九九年など。
- ⑯ もつとも、初出ということになると、空海の漢訳仏典からの引用からであったという(加々美光行『鏡の中の日本と中国』日本評論社、二〇〇七年)。
- ⑰ この点については荒野泰典「近世の対外観」『岩波講座日本通史二二三』所収、岩波書店、一九九四年を参照
- ⑱ 斎藤希史「文学史の近代」古屋哲夫他編『近代日本における東アジア問題』所収、吉川弘文館、二〇〇一年。
- ⑲ 厳密には、フィロソフィーの「翻訳語」としての「理学」は、『職方外記』に見られるので、そのようなものとしての使用は漢訳洋書が最初と考えられる。
- ⑳ 山室信一「日本学問の持続と転回」『日本近代思想大系一〇 学問と知識人』所収、岩波書店、一九八八年。
- ㉑ 森岡健二『近代語の成立 語彙編』明治書院、一九九一年(改訂版)。
- ㉒ 何よりも学術知の編制・制度化自体がこれらの「翻訳」と深く関わる問題として検討されねばならないが、そのほか漢文の読み下し文が主体となった文体の問題や抽象的な概念語が儒学的な含意を離れにくい問題なども検討すべき問題となろう。なお、『日本近代思想大系一五 翻訳の思想』岩波書店、一九九一年を参照。
- ㉓ 前掲拙著『思想史の十九世紀』。ついでながら、儒学は今度は形而下的な「道徳」として再編成されることで、改めて近代日本の知の編制に組み込まれていくこととなる。
- ㉔ 前掲拙著『思想史の十九世紀』。
- ㉕ 前掲山室『思想課題としてのアジア』。
- ㉖ 主な「日本漢語」を列挙すると以下のとおり。科学、哲学、自然哲学、道徳哲学、形而上学、論理学、文学、文法、(倫理)学、人類学、人種・

民族学、美学、芸術、言語・文献学、(心理)学、政治・政治学、法学、経済学、統計学、社会学、地理学、教育学、(歴史)、宗教、体育、体操、物理学、化学、機械学、建築・建築学、生物学、生理学、病理学、天文学、解剖学、衛生学、栄養、光学、光線、農業・農学、農産物、園芸学、地質学、力学、原子、物質、衛星、社会、図書館、雑誌、学士、学位、協会、文明、階級、進化、発展、観察、帰納、演繹、分析、総合、本質、現実、象徴、想像、理性、理論、前提、仮説、命題、問題、定義、弁証法、批評、常識、意識、観念、思想、知識、印象、現象、概念、範疇、原理、人為的、絶対、相対、抽象、具象、偶然、必然、(積極)、消極、唯心・観念論、唯物論、唯名論、現実主義、理想主義、実証主義、功利主義、利己主義、利他主義、人文主義、人道主義、個人主義、民族・国家、国籍・国粹・国体、領域・領土、支配、治外法権、司法、立法、行政、政府、議会、議員、議決、否決、予算、演説、世論、選挙、投票、請願、(民主)主義、憲法、独裁、君主政治、共和、自由、権威、権力、(自治)、代表、政策、政党、警察、独立、秩序、革命、共産主義、社会主義、右翼、左翼、民法、刑法、自然法、国際法、時効、(権利)、義務、特権、仲裁、制裁、動産、不動産、商業、工業、会計、独占、信用、生産、消費、労働、組合、会社、賃金、資本、投機、計画(前掲山室信一『思想課題としてのアジア』、鈴木修二『日本漢語と中国』中央公論社、一九八一年など基礎に、井上哲次郎他編『哲学字彙』『増補英華字典』を参照して補訂した)。なお、これらの中には、無論、儒学・朱子学などの出典にもとづくものや漢訳書に初めて登場したものと思われるものがある。ことに数学や天文学に関わる用語は、明代のイエズス会士の業績に負うところが多いことは、よく知られているとおりである。また、「化学」などは、一九世紀半ばに上海での中国語への「翻訳」が最初で、その後日本でも使用されるようになったという研究がある(石山洋「西洋科学技術導入期における外来学術用語の日本語化過程の総合的研究序説」同『科学研究費補助金報告書』一九九四年)。「日本漢語」「翻訳語」の来歴については、今後の更なる検討が必要だろう。

- ㉗ 岡本隆司『属国と自主のあいだ』名古屋大学出版会、二〇〇四年。
- ㉘ 以下の朝鮮王朝に関わる記述については、前掲山室信一『思想課題と

してのアジア」、玄相允『朝鮮儒学史』玄音社（韓国）、一九八二年、崔錫起『韓国経学家事典』成均館大学校大東文化研究院（韓国）、一九九八年、姜在彦『朝鮮儒教の二千年』朝日新聞社、二〇〇一年、河宇鳳『朝鮮実学者の見た近世日本』（井上厚史訳）ぺりかん社、二〇〇一年（原著は一九八九年刊）、李豪潤『近世における日韓思想の比較研究―明清交替後の東アジアにおける自己認識の展開と転回―』二〇〇三年度立命館大学提出博士論文などを参照した。

⑲ 前掲山室『思想課題としてのアジア』。とくに慶應義塾には一八八〇年代以降は相当数の留学生が来日していた。

⑳ 最近の研究では、大韓帝国時代が朝鮮の国民国家形成において、無視しえない画期をなしていたことが指摘されているが、それを含めての検討は今後の課題とせざるをえない。宮嶋博史・李成市他編『植民地近代の視座』岩波書店、二〇〇四年など。

㉑ 姜海守『『朝鮮学』の成立』『江戸の思想』七号、一九九七年。

㉒ 哲学については、姜榮安『韓国近代哲学の成立と展開』（鄭址郁訳）世界書院、二〇〇五年（原著は二〇〇二年刊）が、韓国哲学における「日本漢語」の影響について詳細に紹介している。

（本学文学部教授）